
東方交差点 ~ ∞ ~

夜っち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方交差点〜∞〜

【Nコード】

N9670S

【作者名】

夜つち

【あらすじ】

東方二次創作小説の主人公を集めて、レッツパーティー！な小説です。今まで自分の小説のところに投稿していましたが、私事情によりこちらに上げさせてもらいました。有名どころの主人公が、何故か揃いまくっているので、楽しんでくれると幸いです。

東方交差点[∞] 参加する作品の作者、及びキャラ紹介（名前のみ）

（前書き

上げ直しました！。

良かったら見ていつてくだせえ！
まだプロローグだけですけどね！。

東方交差点へ参加する作品の作者、及びキャラ紹介（名前のみ）

|| || || || || || ||

東方交差点とはッ!!!

数多^{あまた}とある東方二次創作の主人公を、

とある異次元に集めて!!

パーティーしようぜ!!!

そして、その主人公魅力を大公開しようじゃないか!!

という、メタティックイベントであるッ!!!

時に、運動会。

時に、ドラクエ。

時に、それぞれの世界に大旅行!!

んでもって、時に、作者達の会話。（ん？それは要らない？なあに
聞こえんなあ！）

そんなむちゃくちゃなストーリーなのであるッ！！！

〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃

以上があらすじです。

一応、様々な題目の元、様々なキャラに絡んでもらい。

そしてそれぞれのキャラクターの個性を引き出し、

それぞれの作品に興味を惹いて貰おうという、
ちゃんとした理由あつてのイベントです。

一応、作者同士の会話ついては、それぞれでメッセージを回し、
出来上がった作者同士の文章を掲載するとか言う投げやりなものな
ので、

コレは参加したい方だけです。

では、下から参加キャラ紹介ですー！。

クロル氏

【東方乱力録】より

博麗白雪

十ZO氏

【東方虚刀典】より
鑢零花

TryLeg氏

【東方弾蠍録】より
白雨灰

クラッシャー大總統閣下大韓民国大統領件幻想郷平和主義王帝国魔
王閣下件農民件神件猫

【やくもゆかりのはなし】より
やくもゆかり
八雲縁

陸攻大陸軍大将殿閣下

【幻想の運び屋】より
ウエマツ
上松 光

セロリ氏

【東方高次元】より
大正耕也

赤城氏

【東方狂宴録】より
ズエピア・エルトナム・オベローン

シグマ氏

【東方生活録〜根源より送られた者〜】より
アカシ

スコピオン氏

【幻想の郷に生きた者たち〜騎士編〜】より
ブルート

【東方人魔伝】より

大谷正継

S t a r D u s t 氏

【遊戯王デュエルモンスターズ〜決闘者と理想郷〜】より
青山龍二

目だま氏

【東方妖狼紀】より

妖始^{あやし}

『神』

木下文氏^{あや}

【【東方剥来悪】〜外道が往くは幻想の郷】より
零崎麗織^{ぜろさきりお}

時代の風さん

【東方白雲郷】より
葉月白

空矢氏

【東方四神録】より
四神龍也

【俺？ 博麗の御子？ 斉主？ そんな感じ】より
博麗霊児

待ち人氏

【東方饕餮記】より
八雲 青（やくも せい）

くきわかめ氏

【東方変物伝】より
つきよとつや
月夜陶夜

raitto氏

【希望の光】より
赤池優也

イモ大東京都知事閣下

【迷いこんだら幻想郷へ飴使いの東方物語】より
丹波蓮次

D H M O 氏

【東方魂合変】より

水元鉄生

紅山車氏

【東方起承転】より

まえだこついち
前多孝一

3 氏

【東方影神演鬼】より

影神

連夜氏

【東方七人録〜ある七人の物語〜】より

とおみかなめ
遠命神那女

望夢氏

【-セカイが私を呼んでいる！-】より

ほしののぞみ
星乃希美

黒兎氏

【東方黄昏夢】より

りゅうげつくんと
柳月黒兎

星空の侍氏

【幻想郷の星空】より
やまこしょう

大和将

名前募集中氏

【東方真戦譚〜戦闘神、幻想郷に立つ〜】より
天雪氷武

車道氏

【東方妖魔伝／黄金練成【Ars Magna】編／】より
マルティナ コルテス
Martina Cortes

鳳氏

【天使の救う…巢食う世界】より
せいりゅうじ
青龍寺煌輝

一応自分のところからは
アナウンサー役のバルちゃんのみです。

ついでに、フレイス氏の
【魔法少女リリカルなのはStrikers〜未来を変えるスター
ロード〜 幻想郷編】より
ユウキ・ルナミス

上記の主人公が、もう一人のアナウンサー役に名乗りを上げてくだ
さいました

P r o l o g u e

タイトル：――東方交差点――∞――P r o l o g u e

とある世界のとある場所。あたり一面視界の限りに続いたただ広い青々とした草原、そこに天高く掲げられた旗。ゆるやかな風にはためく旗には、そう書かれていた。

その旗の下、

【魔法少女リリカルなのはStrikers】未来を変えるスターロード――幻想郷編】

の主人公である、ユウキ・ルミナスは溜息を吐いた。髪は耳にかかる程度の赤毛で頭頂から少し右側に跳ねている。両目の色が鮮やかな水色なあたりにアニメ調の気配を感じる、そんな少年だ。

「この企画どう考えても死亡フラグが乱立してる。っていうか、参加したくない……」

ユウキ・ルミナスは自分以外の参加メンバーを見て、その体を確かな恐怖で震わせていた。否、震わせざるを得なかった。

ユウキの手には出演者の名前と、詳細の書かれたパンフレットがある。

それはユウキが何とか事前に手に入れた極秘情報。今旗の下にいるのは自分一人で、他の参加者を見た事がある訳でもないが、パンフレットに書かれた情報を読むだけでも体の底から震えが走る。

ユウキ・ルミナスは痛みが止まらないその頭を抱えていた。何故か。そう問われれば簡単な話である。

——ぶっちゃけ、問題児だらけなのだ、この企画。

たとえば、まず問題児の筆頭に【東方虚刀典】の鑢零花。今企画一番の問題児であった。

……というか、俺は絶対にこの人とは会いたくない……！

このパンフレットを読む限り鑢零花ははっきり言って、狂っている。

一つ一つの技が、神を余裕で殺せるレベル。

そんな何処からどう見ても化け物としか言いようのない主人公。片手で宇宙を滅ぼすって一体何なんだと叫びたくなる。ドラゴン

ボールか。

もし、少し運動するか、という感じで戦えば、

「……ガクガクブルブル……」

どうにかこの死亡フラグを回避したい。

そう心の底からユウキは願う。生き残ることを。この面子だと気がついたらうつかり死んでいたという状況になりかねない。

「……そうだ」

そこでユウキはとある事に気がついた。

「確か……アナウンサーは一人でやるんだったよな！

なら、それを手伝えばいいんじゃないか！！

そうすれば、零花さんと話すことはあっても戦う事はない！！」

それに気づいた瞬間、即座に旗の周囲に設置されたがらんとした参加者席から、アナウンサーのいる、実況席のほうへとユウキは向かう。

本当に朝一で行動した事を今日ほど感謝したことはないと思いつつ実況席へ向かうが、

彼は大事な事を忘れていた。

「あの……、アナウンサーを一人するのは大変ですよ？ 手伝いましょうか？」

「……誰だ？ お前は」

「え？ アナゴ？」

海草の様な青い髪、逞しいからだ、蛇すら射殺しそうな目、その姿を見てユウキは反射的にそう呟いてしまった。

そう、そのアナウンサー役が誰であったかを、彼は知らなかったのだ。

東方交差点 ∞ P r o l o g u e

「絶望した！ どう足掻いても絶望しかないこの世界に絶望した！」

結局の所、ユウキに安息の場所などないのだ。

この物語が交差する世界に存在する限りはユウキは常に死亡フラグと戦う。前門の死亡フラグ。後門の死亡フラグ。右も左も死亡フラグ。

そんな運命と相對するしかないのだ。

「……ああ、お前も参加者か」

アナゴ……ではなくバルバトスの声によりユウキのトリップしかけていた意識が引き戻される。

もし、彼の性格がユウキの知っている通りならば、たぶん次の瞬間には……

「アナウンサーの手伝いか。ふむ。丁度俺も一人では困ってた所だ。いいだろう。手伝ってくれ。こういうことには生憎となれない身でな」

意外と話せた。その事実によりユウキが安堵する。

そしてそれと同時に目の前の男が、バルバトスの様な男の苛立ちが募る。

「あ、始めましてユウキ・ルミナスです。魔法少女リリカルなのは Strikers 未来を変えるスターロード 幻想郷編の主人公をやらせてもらってます」

それに気づかずユウキが自分の自己紹介を始める。

バルバトスはそれに対し気づかれないように小さく舌打ちをした後、

「東方狂怖伝、バルバトス・ゲーティアだ。よろしく頼む」

自分の勝手な奇立ちで人に当たるのは良くないと自制しながら、片手を出しユウキと握手を交わす。

危険人物に見えた存在が普通に接してくれたことに軽い感動を覚えつつ、ユウキはバルバトスの隣の席に座る。

これなら、まだ可能性はあるかもしれないと。

それはもちろん生き残る可能性だ。そう、スペックが色々とおかしくても性格は良識的な人、という可能性は十分にある。

再びユウキがパンフレットを取り出し危険人物をマーキングし始める。

何故かレスっ子や見たら発狂する生き物、異世界を平気で移動する生き物がいて、それを確認して改めてゲッソリする。

そのパンフレットにバルバトスが興味を持ったのか、椅子に座って腕を組んだまま質問を投げかけてくる。

「それは？」

「あ、これですか？」

ユウキがパンフレットを掲げ、それをバルバトスへと見せる。

「これには今回の参加者全員の名前と簡単な情報が載ってるんですよ」

とは言つものの、邪神のインパクトがでかすぎて、他のヤバイ連中のことを忘れていたのだが。

ちなみにもちろんバルバトスの存在も充分ヤバイ連中に含まれるのだが、会ってからの印象で少しは大丈夫かもに落ち着いている。

「ほう、俺にも少し見せてくれるだろうな？」

「ど、どうぞ」

バルバトスの放つプレッシャーに若干気圧されながらもユウキがパンフレットを渡すと、その中身をバルバトスが見始める。

その視線はページを捲るごとに力を強めプレッシャーが強くなる。

「ば、バルバトスさん？」

若干声を裏返しながらもユウキがバルバトスに声をかけると、途端に威圧感が消える。バルバトスが無言でパンフレットをユウキへ返し、

腕を組みながら目を閉じる。

「……すまん。少し歯痒かっただけだ」

「……歯痒かった、ですか？」

バルバトスが己の内に感じるのは歯痒さ。

「こんな歴戦の猛者達を前に、俺の渴きを癒す者を前にして、ただのうのと喋って時間を潰せと言うのか……！」

バルバトスの放つ威圧感が回りの椅子やテーブルを軋ませるのを感じて、即座にユウキのバルバトスの評価が変わった。

「（やっぱりまともなのがない……！）」

パンフレットの中にはまだ常識人に見える人もいたので、そんな人間と話し合えることを祈るユウキと、時間が進むにつれ苛立ちが募るバルバトス。

実況席の空気は最悪だった。

「（……帰りたい）」

既にユウキの心は母、紫のいる幻想郷へと思いを馳せていた。

……

……

……

……

「えーと……やる事は運動会とトーナメントとドラクエ？」

最後のが激しく不安だなあ。……まあ、実況だから関係ないんだろうけど」

何時までも現実逃避ができるわけもなく、ユウキの意識は無理やりにと、この世界へ連れ戻されていた。

バルバトスも時間が経って少し落ち着いてきたのかもアップレッシュヤーを纏わず、とりあえずは静かになっている。

「そう言えばバルバトスさん」

「バルバトスでいい」

落ち着きはしたが今度は暇そうなバルバトス。未だここに集まっているのは二人だけだ。ユウキはこのまま誰も来なければ流れ解散になるかな、と思ったが望み薄だろう。残念な事に。非常に残念な事に。

「僕らってアナウンサーですよ」

「ああ、そうだな」

その言葉で再びイラつきそうになる心を落ち着かせながらも、バルバトスは次の言葉を待つ。

「僕ら、皆がドラクエしている間は どうするんですか？」

「あ」

まさに盲点。

と言うよりは冒険に出かけている連中をどうやって観測するかが問題だ。

ユウキの能力は反射、バルバトスは神並の防御耐性を持つが、平行世界や異世界を観測する方法はない。

だがそれよりも、

「……待つてる間って極限的に……暇ですよ」

「……………」

「……………」

無言にならざるを得なかった。

互いに無言を保ちながら俯いていると、新たな音が生まれる。

足音だ。

その正体を確かめるためにも頭を上げると、

「えーと、確かここでもいいんだよね？ 集まり」

灰色の長髪の男が現れた。鋭い赤い目でユウキとバルバトスを見ながら、黒いコートと髪を風に少し揺らしながら前に立つ。
なんだかその姿は若干ぼろかった。

「あ、悪い。来る前にちよつと旧神の知り合いと——」

たぶん、めちゃくちゃ聞きたくないことを言っている気がするが、
アナウンサーなのだ、これぐらいは頑張らねばと思い、

「えーと、此処であつてますよ」

「おお、そうか。いやあ、変に空間弾いたからちよつと自信が無かつたけど、まあ、なんとかあったか。うん。人生何とかなるもんだ」

少し遠い目を灰色の髪の男がする。

灰色の髪の男—— 白雨灰の言動にはどこか苦勞を感じさせるも

のがある。

持っている実力は抜きにして、実際どこか苦労しているのだろう。そう思うと少し親近感がわくが……

「バルバトスさん」

「何だ」

「戦意を引いてください」

体から赤いオーラっぽいものを発すバルバトスがいた。

それに恐怖を覚えるユウキ、そしてそれとは裏腹に灰の唇は笑顔に歪む。

「へえ、殺るのか」

「ああ、殺るさ」

戦闘狂に言葉はいらないとよく言ったものだがこの二人はそれを体現してた。

ユウキは思った。あ、この企画始まる前に終わった、と。

バルバトスが目の前のテーブルを踏み抜くように立ち上がり、灰が笑顔を浮かべながら一歩下がり――

「キング「必然『キングクリームゾン』」」「ジェノ「少し落ち着け」」

次の瞬間、二つの姿が頭から地面にめり込んだ。その後ろには新たな姿が二つ現れていた。

片方は黒い袴と着物の男で、前髪が目隠すほどに長く、頭に鬼の仮面を括っているのと片袖がないのが特徴だ。

もう片方は幼女と言っているほどの小さな少女、長い白い髪を持ち、赤い衣を白い帯で締めている。

鑢零花と博麗白雪。

一瞬ユウキの脳裏に二人合わせて人外S！
とかポーズをとる姿が浮かぶがそれを霧散させる。

荒れ狂う戦闘狂を不意打ちとは言え一瞬で地の中へと沈めた、Mr & Ms インフレ。

鑢零花。【東方虚刀典】の主人公であり、企画最大の問題児。通称邪神。

とりあえずユウキからすれば恐怖の象徴と死亡フラグの塊にしか見えない。なにしろグツとガッツポーズするだけで世界が五つぐらい吹き飛ばらしい。

そして博麗白雪。【東方乱力録】の主人公である。

姿は童女のしか見えないが、その力は強大で、長い時を研鑽と共に過ごして来た為、かなりの強者である。

此方は鑢零花と違って人間に対して大変温厚であるため、危険はないのだが、やはり力を持つ存在と相対すると怖い、と思うのは間違いだろうか。

「いい年した大人なんだから少しは抑えろアホ」

「どうせ後でトーナメントやるんだからその時に存分に戦えアホ」

だが灰もバルバトスも頭から地面に埋まっているため返事ができず、足をぶらぶらさせている。その足に零花が手をかけ引っこ抜こうとすると、

「あ、やべ、力加減間違えた」

力加減を言葉通り間違えたのか大きく腕を振り上げ、両手に掴んでいるバルバトスと灰の足を思いつきり投げ飛ばしてしまった。

「ぶるううう ああああああああ……」

「おいイイイイイイイイイ……」

ドップラー効果を残し瞬く間に地平線の彼方へと二人が飛んでゆく。それを白雪が妙に感心した声を上げながら見、横目で零花を睨むと、零花は両肩を揺らしながら二人の飛んで行った方向へと、大地を踏み抜くように跳躍し後を追った。

「はあ、アイツもアホだったか……」

白雪がため息を吐きながら零花が追っていった方向を見る。

もう既にユウキの視界では捕らえられないほど遠くへ行っているようだが、神である白雪には見えるのだろう。

「え、えーと……」

「ん？ あ、ごめんごめん、私は博麗白雪ってーの。
ここが実況席でいいんだよね？」

「あ、ユウキ・ルミナスです。うん。ここが実況席だと思いますよ。今は実況席跡になってますけど」

目の前の粉碎されたテーブルと、
いなくなつたバルバトスが戻ってくれば完璧だろう。

……うん。確実に今現在は自分の存在を除いてここは実況席として機能してないね。

企画自体は楽しみだが参加者が参加者だけに後悔する。

「ははは、破綻したばかりの連中だけど、悪い連中ばかりじゃないよ。そう警戒する必要はないよ」

「そう、ですか。いや、そうですね。
力を持つてゐるからって警戒したり怖がったりするのは失礼ですよ
ね」

「そうそう。もっと落ち着くべきだよ」

ははは、と二人の笑い声が辺りに響く。

実際に、動物と言うのは警戒して接すると逆に警戒心を持たれ、
お互いにお互いを警戒してしまうのだ。

故に、警戒を解き腕を広げて相手を迎え入れるのが大切だ。

「——死んでも蘇生能力持ちがいるし」

「それ、解決策じゃないですよ?! 明らかに手遅れですよね?!」

さらつと続いた言葉にユウキは上げて落とされる絶望感を味わった。死亡体験などいらない。

「零花は嫁に何度か殺されて閻魔に挨拶しながら蘇ってるって言うてたし」

「なんですかそのバイオレンスな家庭は?!」

「夫婦生活は円満らしいよ。夜の営みとか」

「別にそんなの知りたくありません!」

白雪の言う言葉にユウキの顔が赤くなる。

ここでやはり何千年も生きた神と人の差が出る。

「それになんだか鑢さんと親しげですね?」

「あ、アレは子供には優しいらしいよ? ……私を子ども扱いってのがム力つくけどね。」

でもまあ、身長的なことはもう慣れたしね」

そう言った白雪は少し煤けて見えた。だったら何故つるんで現れたと言いたい所だがその言葉を飲み込む。

元より、幻想郷は理不尽な存在で溢れているのだ。

人の話を聞かないのは通常装備として、反則的な力を持った存在が闊歩している。

自分も、能力持ちとしては反射と言う中々反則的な能力を持っているが、その認識も相手の能力を操れる童女や異世界を移動できる

旧神、平行宇宙を滅ぼす邪神相手には無に等しい。

バルバトスの威圧感から自分のみを守れたのはせめてもの救いだ。

「ま、テーブルはアホの一人が直すでしょ。強く生きるユウキ」

「はい……」

白雪がユウキに背を向けて近くの参加者用の席へと向かう。

ユウキのいる位置から席の方を見ると、どうやらいつの間にかそれなりの人数が集まりだしているようだ。

パンフレットによれば全部で30人ほどの参加者がいることを思い出し、それを思い出しつつ数えてみると案外まだ少なかった事に気づく。

……そしてなんだか地平線の向こうで衝撃波が飛び散るような光景が見える。

と言うかあれは確実にさっき跳んで行った三人の方向だ。

「あ、鑢さんが空を飛んだ」

物理的な意味で。目視可能な範囲まで近づいてきたようだ。

そして同時にその光景に頭が痛くなってくる。

このカオスの権化を押さえられる自信が自分にはない。

余りよく考えずアナウンサーと言ったが、アナウンサーとはよく考えれば、真っ先にツツコミを入られて、そして解説をする役所。つまり、

「……安置がない？」

それにやっと気づき、目を閉じて頭を抱える。
アナウンサーになるとかどーとかは最初から意味がなかったのだ。
この世界自体が崩壊の危機に見舞われているのだ。グッバイ世界。
グッバイ自分。

何処へ参加しても逃げても結局は自分がいる場所ごと消し飛んでしまえば意味はない。

「……もうお終いだ……」

死亡フラグ回避ならず。その言葉が頭の中で響いた所、

ドン

目の前で何らかの質量が落ちたような音がる。

それに少しの恐怖を持ちながらも目を開けると、一般的な現代人の服装の一人の男性がいた。

「あの、大丈夫ですか？ 頭を抱えたりなんだか悩んでるように見えるけど」

神は見捨ててなかった。邪神には見捨てられたがもつと善良な神々はユウキを見捨てていなかった。

思わず急に現れた普通の感性を持つ相手に感涙しそうになった。
何よりも服装がいたってノーマル。言動もノーマル。

つまりは、限りなくノーマルな人間である可能性が高い。

「あ、ありがとうございます……！」

「な、泣きそうですけど大丈夫ですか？ 本当に」

「ええ……普通の人間に少し感動しただけです」

「——ああ、うん。その気持ちは分かりますよ」

一瞬目の前の人物が停止したような気がするが、その可能性や考えを即座に頭から振り払う。疑ってはいけけないのだ。

「始めましてユウキ・ルミナスです」

「大正耕也です、よろしく」

ユウキと耕也は堅く握手を交し合う。

「ここにいてるって事は……」

「あ、アナウンサーをさせてもらう事にしました」

「あれ、確かアナウンサーってバルバトスがやるんじゃないっけ？」

「自分も立候補したんですよ」

「そうなんですか？」

「うん。タッグトーナメントは確実に死ねるので、ここで実況する事は確定とさせて貰ってます」

「あー……うん。どうしても倒せない人っているよね……」

「分かってくれますか……」

「まあ、私も多少は戦えますけど、あんなぶっ壊しまくる事は真似できないので……おかしいですよね」

なんだか正常な感性を持つ人間やつと出会えた。

それがたまらなく嬉しいとユウキが喜んでいる中、段々と人の声が増え始めている。

「うん？ ああ、結構人が増えてきたね」

「そうですね」

良く見渡せば何処かのキャラに似たような姿の人物がいれば、全く知らない人物もいる。

東洋系の着物を着た人もいれば西洋系の洋服を着ている人もいる。

中にはセンスを疑うような格好をしている人もいるが、

「……何だか、普通そうな人がそれなりにいますね？」

「幻想郷はそこまで魔窟だとは思いませんよ？」

平行世界といってもかなり広いんですよ。宇宙が無限に広がると同時に、確立の分岐も無限ですからね。いろんな人がいるはずですよ」

宇宙とは無限である。

宇宙の果てへと到達したものなど存在しない。故に、その果ては無限である。

可能性が可能性を分岐させあるはずの未来が死にあるはずの世界が生まれる。

そしてその世界は混じり合う事無く分岐し続け新たな世界が新たな世界を生み、そして無限に平行し続ける宇宙が生まれる。

だから、可能性とは無限である。

「だから宇宙の数だけ幻想郷があつて、そしてその幻想郷の数だけ異なる物語を経験した異なる人が居るんだと思うんですよ。

だからユウキさんもあまり希望を捨てないで、もう少し前向きになつてみたらどうですか？　少しは変わるかもしれませんよ？」

「うん……そうですね。少し後ろ向き過ぎましたかもね。

ありがとうございます耕也さん！　自分、もうちょっと頑張りますよー！」

真正面から感謝された事が少し恥ずかしいのか、耕也が僅かに視線を逸らし頬をかきながらもその言葉に返事を送る。

「あー、いえ、力になれたのならいいですよ。

私もどちらかと言うと戦う力はないほうですから」

耕也は嘘を言っていない。戦闘力自体は低いほうだ。

その代わりに防御力と言う一点においてはこの場の誰よりも優れた鎧を持っている。

だがそれをユウキに言うのは酷なので耕也はそれをあえて黙っていた。

希望を拾った少年を潰す必要はない、と。

「それじゃ私ももう行きますね。一応参加するので」

「あ、はい。頑張ってください！」

「優勝は絶対無理ですけどね」

タッグトーナメントに関しては八百長が介入するまでもなく、完璧に、完全に、その優勝者は全ての参加者の中で確定している。

というよりその存在を越える方法が分からないというのが現状だ。

「それでは……」

最後に耕也が軽く手を振り虚空からテーブルを新しく創造し、挨拶して背中を向ける。

どこかその背中を大きく感じながらも、テーブルの上にパンフレットを置く。

改めてよくよくそれを確認すれば、

「あ……意外といった……」

能力を持っているけど全く使えない人や、全く戦闘のできない人がタッグトーナメントに参加していた。

それを見て、少し自分を恥じると同時に早まってしまった、そう思う。

自分より明らかに下位の実力者だ、とユウキは思う。

なのにそれでもタッグトーナメント……つまりは戦いに参加表明している。

自分はある程度なら戦えるのにそれでも逃げてしまった。

その軽率な行動に恥じてしまったのだ。

だからこそユウキは決める。

「……うん。『やる』って言ったらやらなきゃダメなんだ」

逃げてばかりはいけないのだと、向き合う事も必要なのだと。

それに種目はタッグトーナメントではなく、他にもドラクエの世界で冒険や、大運動会等も存在している。

自分ができるのは最善を尽くす事だと。

そんな時、少しボロボロになった三人の姿が帰ってくる。

楽しそうに肩を組む鑢零花と白雨灰、そして少しでも表情がにこやかなバルバトス。

どうやら三人は地平の果てで殴りあう果てに何かを見つけたようだ。

明らかに狂人の発想だが、そこは気にしてはいけない。

納得したら自分も狂人入りだと納得してしまうのだ。

零花と灰は肩を組んだままなにやら邪神とか旧支配者とか口走りながら、共に参加者の集まっているテントへと向かう。

そしてバルバトスはユウキの元へと戻ってくると、

「……壊れたのではなかったか？」

「親切な人が新しいのを作ってくれましたよ」

「創造系の能力者か。また便利なものだ」

新しいテーブルに納得すると回り込み再び椅子に座り腕を組む。バルバトスが放っていたイライラのようなプレッシャーはなく、今は何処となくとっつきやすい雰囲気を出している。

とりあえず耕也と喋って色々と落ち着きだし勇気をもらったユウキは、

「バルバトスさん」

「何だ」

「満足は出来ましたか？」

そう言うユウキの顔を一瞬だけ驚いた様子で見ると、少し感心した表情になり、元の表情へと戻し、

「いや、まだだ。まだ戦い足りん。だが今はこれで十分だ。そのうち遊びに行くからその時盛大にやろう、とな」

ユウキとしては全力で願い下げたい提案だろうが、この狂人としては中々嬉しい事だったのか少しだけ口元が嬉しさに歪んでいる。余り言葉では飾らない男だということを知っているユウキはただ、

「バルバトスさん」

「何だ」

「頑張りましょうね！」

「……………ああ」

ただただ、自分のできる最善を尽くす事にした。

あらゆる物語が交わる世界

あらゆる幻想が交わる世界

そこに集まったのは誰でもなく、物語の主人公

誰かが言った、自分の物語の主人公は自分であると

だったら交わらせよう

物語と言う物語を

ありえるはずの無い邂逅を

存在しない冒険を

生まれなかった感動を

考えもしなかった終わりを

故にここに始めよう

多くの物語が交差するこの世界で、

この世界だけの^{デウス・エクス・マキナ}大団円を目指して――

東方交差点 ｝ ∞ ｝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9670s/>

東方交差点 ~ ∞ ~

2011年7月27日22時38分発行